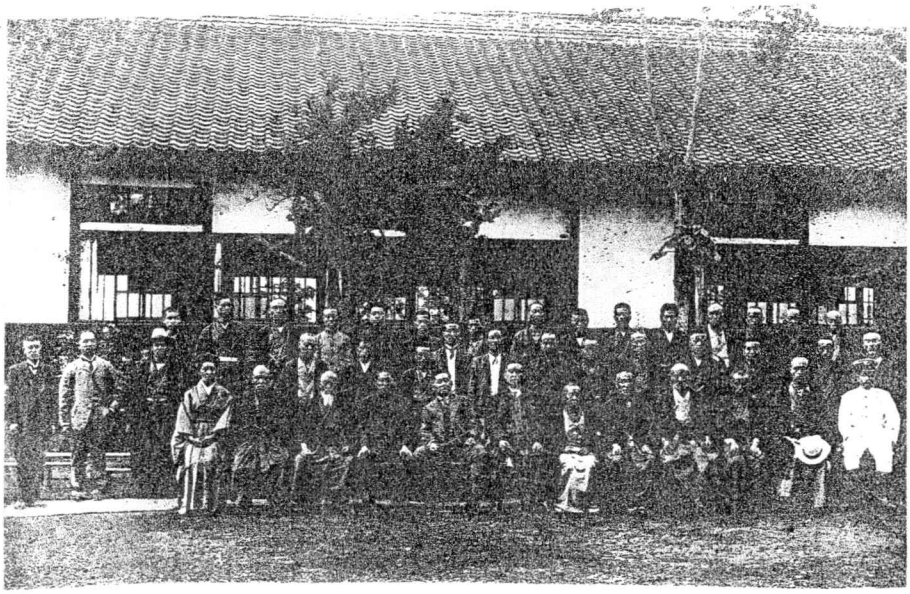
住みよい坂戸にするために

大川平三郎物語

坂戸市立三芳野小学校

大川平三郎物語



人として郷土を愛することは、自然なことです。祖先に対する感謝の気持ちをもって、郷土のためにつくすことが大切です。

平三郎

春です。

今日は三芳野小学校の入学式の日です。

「おはなが　いっぱいさいているね。」

一年生になったばかりの女の子が、枝一面にさいているさくらの木を見上げました。

女の子のお母さんは、にっこりうなずきました。

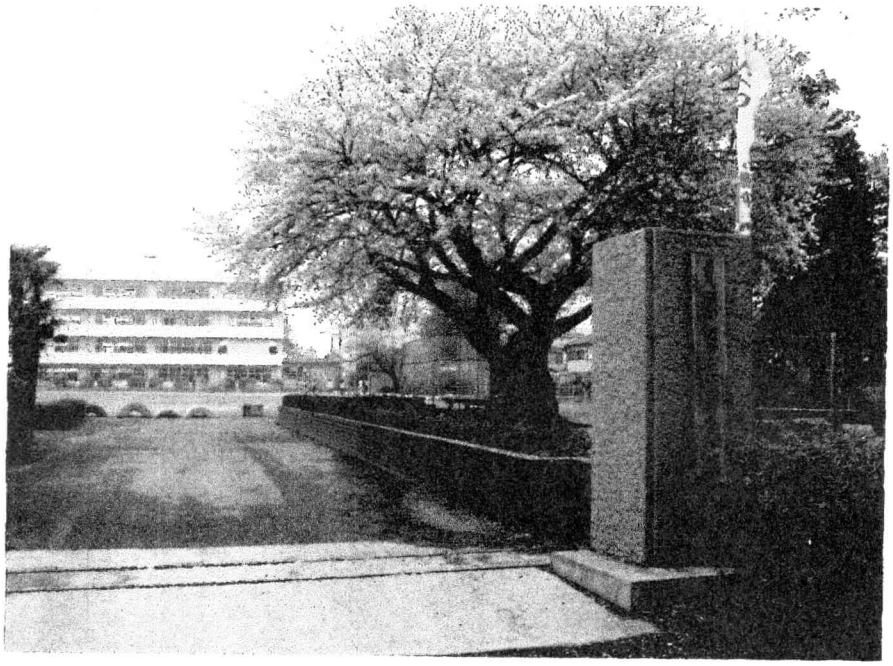
見わたすと、広い校庭のまわりを、まるで、絵の具でさくら色一色にえがいたようです。

女の子は、大きな大きな石の板に目をとめました。

「これは、なあに。」

お母さんはちょっと考えてから言いました。

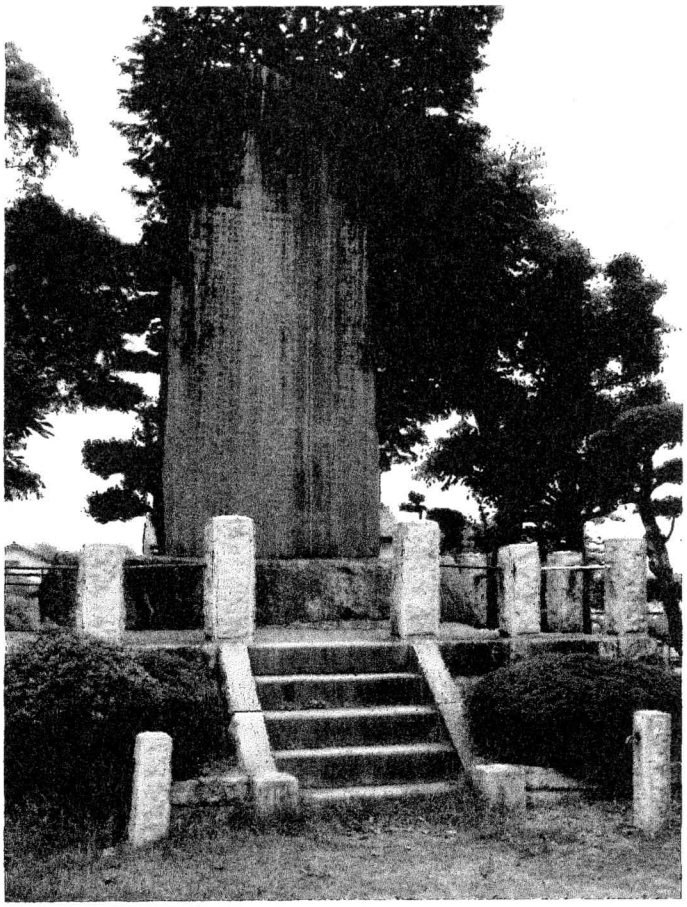
「これは、きっと学校のだいじな宝物よ。」



目をこらして見ると、大きな石の板には文字がたくさん書かれています。

実は、この板（石碑※）には、この小学校のためにつくした「大川平三郎」のことが書かれているのでした。

※石碑（できごとなどを後に伝えるために文章をほりつけた石）



大川平三郎翁彰功碑

大川平三郎は一八六〇年（万延元年）十月に坂戸市横沼（川越藩三芳野村）に生まれました。

平三郎のおじいさんは剣術のうでまえがすこぶる高く、あたりに名が知れわたっていました。

道場※を開き、毎日、多くの弟子たちが剣道を習いにやってきました。

「えいー」「やー」

「こてー」「めん」「どうー」

と、道場からいさましい声が聞こえてきます。

弟子たちは近くに住んでいる若者ばかりでなく、越辺川を渡し舟※に乗って道場にやってくる者もたくさんいました。

※道場（剣道や柔道などの練習をする所）

※渡し船（人や荷物を乗せ、川の両岸を行き来する舟）

しかし、平三郎の家は豊かではありませんでした。多くの弟子たちをかかえてはいたのですが、けいこのお礼を、入門※の時しか弟子の家からもらわなかったのでした。

「金もうけのために道場をやっているのではない。」

おじいさんのいつもの言葉でした。

※入門（教えを受けるために、弟子になること）

年の暮れが近づいてきました。

お正月になると、道場では新年をむかえての初げいこがあります。その時、弟子たちにふるまうおもちにするお米がありません。

家には、ゆとりのお金がないのです。

平三郎の母はしかたなく、妹のお嫁(よめ)に行った先へ、お金をかりにいくことにしました。

そして、おもち代のお金を手にいれることができましたので、ほっとしました。

「お母さんはがまんになれているから大丈夫(だいじょうぶ)。」と、いつものやさしい顔になって、にこりとしました。

小さな平三郎はそんな母を見て、「今日のお母さんは、自分の妹の前で、どんなにはずかしい思いをしただろう。」と、とても悲しくなりました。

「きっと今にお母さんを幸せにしてみせる。」と心にちかい、今までにまして、母の手伝いをたくさんするようになりました。

平三郎の家ばかりでなく、三芳野村のどの家も、生活が豊かではありませんでした。

三芳野村の東側の越辺(おっぺ)川の手前には、美しい田んぼが広がっています。毎年お米がたくさん実って、くらしが良くなっていくはずなのに、いっこうに楽な生活にはなりませんでした。

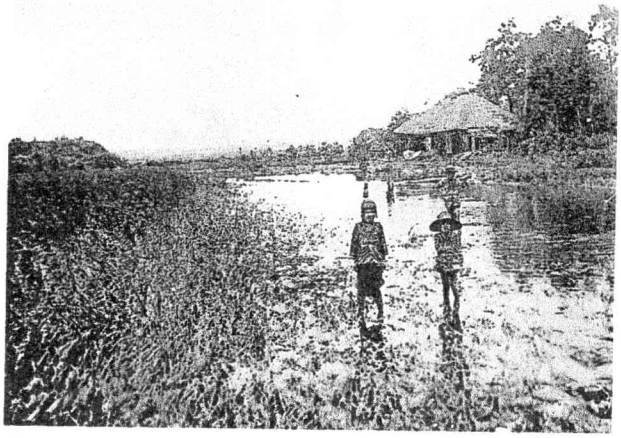
「どうか、今年はあらしが来ませんように。」

村人は一心に神様においのりをしました。

しかし、たびたび台風がやってきては、川の水がふえ、土手のすきまから田んぼに流れこみ、大きな池のようになってしまいます。

秋を待たず、いなほはくさってしまい、いね

のかりとりができません。
お米のとれない年が多かったのでした。
「今年も、いねがぜんめつだ。」
「来年は、たくさんお米がとれますように。」
村人は、まずしさといつもいっしょでした。
しぜんの力には勝てないのだと、あきらめるよりしょうがありませんでした。



（坂戸市小沼　1910年）

平三郎は十三才になりました。

平三郎はしっかり勉強して、将来、ふるさとに役立つ人になりたいと思いました。

そこで、東京で会社の社長をしていた渋沢栄一※というしんせきのおじをたずねました。

平三郎は、栄一のおくさんの姉さんの子にあたります。

栄一はこころよく平三郎を引き受けてくれたのでした。そして、「書生」として平三郎は渋沢家で生活するようになり、朝早くから家のこまごまとした仕事をこなしていました。

そのころの東京には、明治時代になってから、新しい西洋の文化があふれていました。

※渋沢栄一（深谷市出身で、多くの銀行、会社などをつくった。）

※書生（他人の家の家事を手伝いながら勉強する学生）

※西洋（ヨーロッパやアメリカをさす）

「今までの古い考え方ではだめだ。これからは西洋の学問を学んでいくことが大切だ。」と、考えるようになりました。

そして、念願※の学校に通いはじめました。

平三郎は、学校では、新しい西洋の学問をたくさん学びました。

ドイツ語を学ぶかたわら、自分の力だけで英語も学んでいきました。

※念願（かねてからの願い）

平三郎が十六才になったとき、学校をやめて王子製紙という工場の職工※になりました。

平三郎の家は生活が苦しく、学校へ通わせるゆとりがなくなったためです。

※職工（工場ではたらく人）

母の便(たよ)りでは、

「家のことは気にしないで勉強しなさい。お金のことはどうにでもなるから。」

と、心配しないように書いてはありました。

平三郎には母の気持ちが、とてもよく分かりました。

「お母さん、勉強は学校へ通わなくてもできます。仕事をしながらでも、これからも、ちゃんと自分でやっていきますから。」

平三郎は、あえてお金のことについてはふれませんでした。今考えているこれからのことを、母に分かりやすく返事を書きました。

工場の職工の給料(きゅうりょう)は、生活していくのに

ほんのわずかでした。それでも母の苦労を考えると、自分の力で生活ができることの喜びがありました。

工場にはイギリスとアメリカから技師として、高い給料で指導者がやって来ていました。

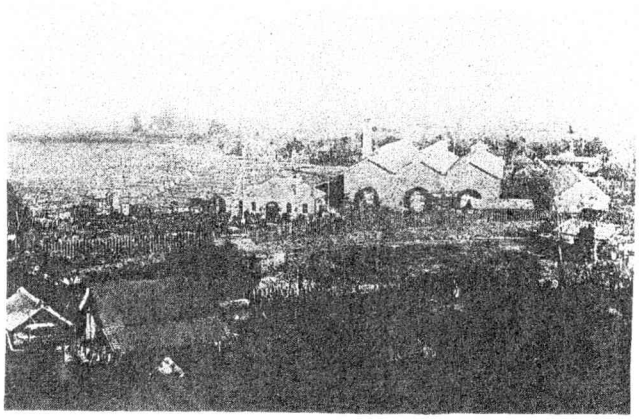
しかし、技師とは名ばかりで、安い給料ではたらいている技術のある職工と、どちらがすばらしいのだろうかと、平三郎には思えてなりませんでした。

このような今のままのやり方では、工場は少しもよくならないでしょう。

「自分の力でやってみせる。」

開業当時の工場

一八七五年



紙の博物館所蔵

平三郎は機械製図の勉強を始めました。西洋人の力をかりず、日本人による新しい技術を開発して、今よりすぐれた紙を作れる工場にしていきたいと願ったのでした。

そして、平三郎が二十才のとき、アメリカではどのように紙を生産しているのかを、日本人の職工に目と体で学んで来られるよう会社に提案しました。

会社の考えた結果は、提案した大川平三郎自身でアメリカに行き、学んできた技術を生かすようにとのことになりました。

わずか二十才の平三郎はアメリカに一人で旅立ちました。

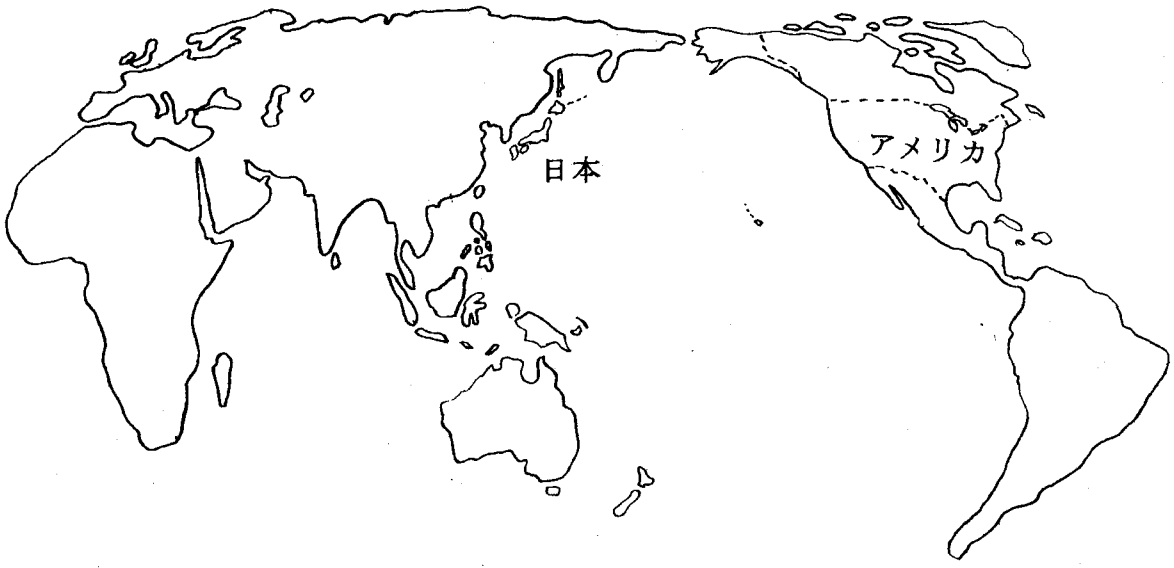
船は長旅でした。

見も知らぬアメリカの大地に不安はありました。けれども、新しい技術を学んでくる自信と喜びに満ちあふれていました。

今までの四年間、仕事をしていた工場で、外国から来た技術者と英語で話をしたり、紙を作る機械について細かく教えてもらってきていたからです。

平三郎にとって、英語や紙を作る機械について、心配はいっさいありませんでした。

自分で学び取った英語を使って、アメリカの製紙技術を着実に学んでいくことがで



きました。

また、一年あまりのアメリカ生活で、日本では味わえない進んだ考え方も学んでくることができたのでした。

一番の喜びは、給料として得たたくさんのお金を、母へわたすことができたことでした。

日本に帰った平三郎は、紙の生産について研究を始めました。

「これからは紙をたくさん使われるようになる。日本にある材料で、たくさんの安い紙を作る方法はないだろうか。」

研究を進めていったところ、日本のどこに

でもある「いなわら※」に気づいたのでした。

「多くのわらは捨(す)てられてしまう。そのわらを、紙の材料にすればよいのだ。」

平三郎はわらから紙を作る機械(きかい)の製作(せいさく)にとりかかりました。

そして、工場の機械を改良(かいりょう)して、「いなわらパルプ※」の大量生産(たいりょうせいさん)に成功(せいこう)することができました。

今まで田んぼにうち捨てられた多くの「いなわら」が、農家の家にお金になってもどってきたのでした。

※いなわら（いねをかりとり、だっこくした後にのこったくきの所）

※パルプ（植物を機械や薬品でほぐし、紙などに加工しやすくしたもの）

五年後には、ヨーロッパの製紙工場を調べに行き、今度は木材を原料にした「化学パルプ」の製造に成功しました。

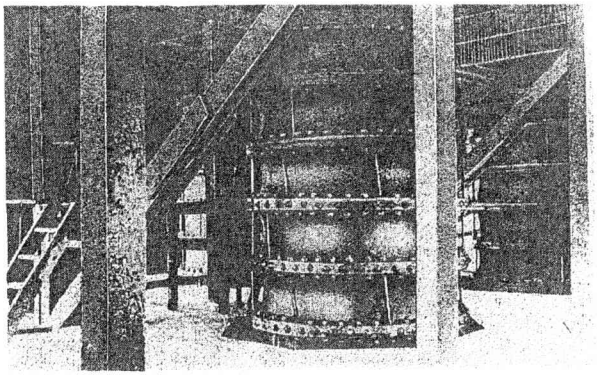
このののち、平三郎は豊かな日本にするために、多くの仕事に参加していきました。

セメント工場、化学工場、電力会社、鉄の製品を作る工場、銀行など、八十もの会社の仕事に加わり、成功をおさめることができました。

それは、平三郎のそなえ持った広い心と会社作りへの情熱によるものでした。それによって、多くの人からしたわれ、ますます大きな仕事をすることができたのでした。

蒸煮窯（木窯）

化学パルプ製造用



紙の博物館所蔵

平三郎は、三芳野村にとっても、村人のためにもつくしてくれました。

まず、村を豊かにするために、「むしろおり」を村人にすすめました。

むしろはいなわらをあみ、やわらかなたたみのようにしたものです。むしろはいたみやすい紙を運ぶ時に、とても役立ちました。

冬の仕事として、むしろおりやなわ作りの仕事がふえました。お金を得られるようになったので、大変、村人に喜ばれました。

※むしろ（わらであんだしきもの）

平三郎が六十六才になった年、幼いころから夢見ていた「水の害のない村づくり」に取りかかりました。

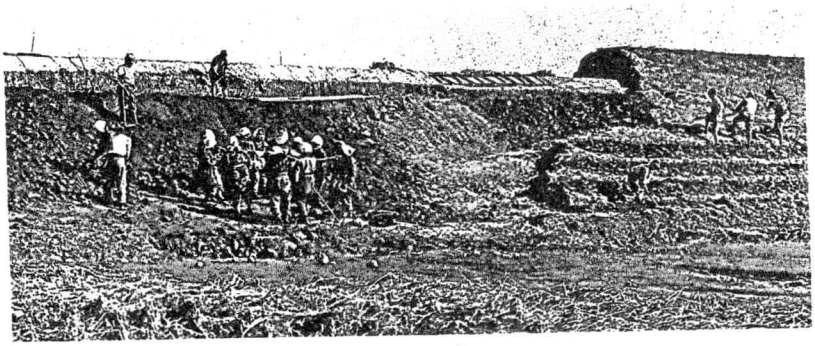
今まで大水の多い年は、年に三、四回もいねが水につかってしまうことすらありました。

「村人のだいじな田畑や道を大水の被害から守ってやりたい。そのためには、堤防を作り直さなければならない。」

大水でなやまされ続けていた村人のために、平三郎は堤防の工事を計画したのでした。

「大水を防ぐ堤防作りを許可してください。」と、信用組合の代表として、原次郎※は、何度も何度も平三郎の郷土を想う願いを、埼玉川や堤防を直すことに努力した。名誉市民）

※原次郎（三芳野出身で



ていぼう工事

県庁に訴えたのでした。

心をつくして訴え続けた結果、やっと堤防を築くことをかなえることができました。

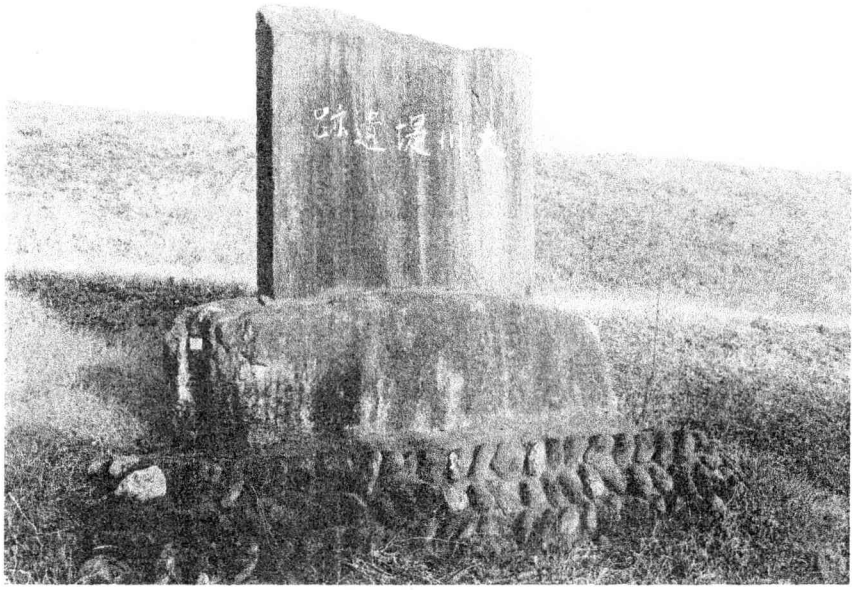
そして、数年の後には大水の心配がなくなり、お米がたくさんとれるようになりました。

この後、この堤は「大川堤」と呼ばれるようになりました。

平三郎が六十九才になりました。

三芳野村の小学校の立て直しもしました。

「子どもは宝。豊かな国にするには学問が大事です。学ぶ子を育てることによって幸せな家庭ができるのです。」



今までの小さな学校から、多くの子どもたちが通ってきて学べるようにと、学校の工事を始めることにしました。

新しい大きな校舎をつくりましょう。

校庭をもっと広げましょう。そして、大雨がふっても困らないような、水はけのよい校庭になるよう工夫しましょう。

このような計画ができましたが、学校をつくるためにはお金が必要です。

平三郎にとっては、すべての工事の費用を出すこともできました。しかし、それでは平三郎個人の学校になってしまいます。

そこで、村人と半々でお金を出すことに決めました。村人も快くさんせいしてくれ

ました。

しかし、大川平三郎は多くの人におしまれながら、一九三六年（昭和十一年）十二月三十一日、七十七さいでなくなりました。

今では、「製紙王」と呼ばれています。何気なく使っているいろいろな紙は、先人たちの努力によって生まれた物なのです。

また、「大川育英会」が作られ、学問を志す人々に、資金の協力を続けてきています。

大川平三郎は「郷土の偉人」として、これから先も長く伝えられていくことでしょう。

※育英会（すぐれた才能の学生を育てる会）

坂戸市立図書館にいってみてください。二階に「大川平三郎」の展示コーナーがあります。

たくさんの写真や手紙、手作り作品などが展示してあります。

じっくりと見て、偉人の面影をたどってみるのもよいと思います。

また、三芳野小学校の校庭にある石碑、勝光寺にある平三郎の像、道場跡や大川堤の記念碑など、実際に調べてみるといいですね。

【大川平三郎に関係した年表】

（年令は数えで表しているので今の満年齢より一才多くなります。）

年号	年令	大川平三郎に関係した事がら
一八六〇年（万延元年）	一才	十月二十五日　川越藩三芳野村（現在の坂戸市横沼）に父大川修三、母みち子の次男として生まれる。 祖父平兵衛は、大川道場で多くの弟子たちに剣術を教える。
一八七二年（明治五年）	十三才	東京に住む渋沢栄一の書生になる。大学南校（今の東京大学）に通いドイツ語を学ぶ。英語を独学で学ぶ。
一八七五年（明治八年）	十六才	王子製紙会社の図引工となり、後に職工となる。

一八七九年（明治十二年）	二十才	アメリカで製紙技術を学ぶ意見書を会社に提出する。 七月アメリカへ行き、一年四ヶ月製紙法の研究を重ねた。
一八八〇年（明治十三年）	二十一才	アメリカから帰国後、アメリカの麦わらを加工した製紙法を改良し、米俵などの稲わらを原料とした紙の製造を開始した。
一八八四年（明治十七年）	二十五才	五月イギリス、ドイツの工場を視察して、パルプをもとにした紙の製造法を研究した。
一九二四年（大正十三年）	六十五才	三芳野村を豊かにするために、むしろおりをすすめる。奨励金三百円を寄付する。 埼玉県出身の学生のために、五十万円を出して大川育英会をつくる。

一九二五年（大正十四年）	六十六才	三芳野村信用組合の代表の原次郎とともに、工事の全費用を出資して堤防を築く。
一九二六年（昭和元年）	六十七才	三芳野村の小学校の校庭に「大川平三郎彰功碑」を建立する。
一九二七年（昭和二年）	六十八才	堤防が完成する。後に「大川堤」と呼ばれるようになる。
一九二八年（昭和三年）	六十九才	三芳野村の小学校の増築、新築、校庭拡張のため、工事の費用の半分を出資する。
一九三六年（昭和十一年）	七十七才	十二月三十日死去